慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戦争社会学文献雑考
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1935
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.29, No.10 (1935. 10) ,p.1585(189)- 1597(201)
JaLC DOI	10.14991/001.19351000-0189
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19351000-0189

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

般大衆に對してのみならず、農業者に取つても亦、極めて有害なる影響を及ぼさなければならなかつた。實に當時の立法者は價格の安定を期圖して、却つて其の動搖を大ならしめたのである。高價格に刺激せられて、劣等地は耕作に致され、又、資本は耕地の改良に投入せられた。而して豊年に於ける供給の增加は生産者をして破滅を免れざらしむる迄に價格を低廉ならしめた。加之、高價格は亦、農民をして其の土地の堪へ得るよりも以上の高地代を提供せしめ、其の後に於ける一兩年の低價格は彼れ等をして非常なる苦境に陷らしめなければ已まなかつた。農業階級若しくは報酬に値する不動なる價格を維持せんことを欲する者は須らく、單なる輸入の制限よりも、寧ろ輸出奬勵金を增加し、而して之れを受く可き輸出價格の限度を決定す可きであつた。（Thomas Tooke, A History of Prices and of the State of the Circulation in 1838 and 1839, with Remarks on the Corn Laws, and some of the alterations proposed in our banking system, 1840, pp. 44-47,; Nicholson, op. cit., pp. 91-92. n.）。輸出奬勵金の制度は實にアンダーソンがアダム・スミスの面を犯して熱心に擁護せる所であり、マルサスが其の維持の必要を唱道せる所のものであり、而して原則として農業保護に反對せるリカードオにして尙ほ且つ之れを一定率に於いて維持せんとせる所のものであつた。而も一千八百十五年の條例は之れを廢止し、二十二年の其れは之れを復活せしむることがなかつたのである。

戰爭社會學文献雜考

加田哲二

一

現代は戰爭時代ともいふべきほど、戰爭が問題となつてゐる。新聞・雜誌・著作に戰爭の問題は、その數を知らぬほど論ぜられてゐる。あるひは純然たる戰略的立場から、または戰時經濟機構の立場から、また國際情勢の關係から論ぜられてゐる。それらの論著は一應戰爭問題の解說として、われわれを益するものもあるし、また單なる好戰的精神の發露に止まり、戰爭が終極の手段であり、且つ目的であるかの如き戰爭讃美論に終つてゐるものもある。而して、これらの論著が、われわれの要求を滿さないのは、それが主として、時事的現象の表面的解說に終つてゐる場合が多いからである。またわれわれの學修した歷史は、殆んどそのすべてが戰爭の歷史であるにも拘らず、戰爭の本質の問題については、何等寄與するところのないものであつた。われわれは、戰爭の如き重要問題についてのかくの如き學問的不備を嘆ぜざるを得ない。

二

戰爭の本質の問題は、社會學的に觀察することによつて、その闡明に近づき得るのではないかと考へる。この意

味において、社會學の一部門としての戰爭社會學の存在が可能である。現にシュタインメッツの如きは、大著「戰爭社會學」(Soziologie des Krieges 1929) を有し、ソローキンは、その「現代社會學說」において、戰爭社會學 (Sociology of War) を一の學派として區別してゐる。またイェルサレム、シュパンなども戰爭社會學といふ名稱を用ゐてゐる。それは次の如きものである。

Othmar Spann, Zur Philosophie und Soziologie des Krieges. 1913.

Wilhelm Jerusalem, Der Krieg im Lichte der Gesellschaftslehre. 1915.

戰爭社會學の第一の課題は、戰爭とは何ぞやの問題を決定することである。ある論者は、戰爭の意義を甚だしく廣義に解釋する。この最廣義における戰爭とは、鬪爭一般とその意義を同一にするやうに思はれる。かくの如き見地は、鬪爭を人間生活の基本的事實と觀察する人々によつて、採用せらるゝやうである。例へば、ノヴィコフの「鬪爭の法則は、一の宇宙法則である。」(Novicow, Les luttes entre sociétés humaines et leur phases successives. Paris 1896) またフェリの「生存鬪爭は、すべての生物におけると同じやうに、人類に內在する一法則である。」(E. Ferri, Socialism and Positive Science. London 1909) といふやうな立場に立つのである。マルクス—エンゲルスの「從來の社會の歷史は階級鬪爭の歷史である」(Das Kommunistische Manifest. 1848) といふ命題は、後に至つて、「原始的土地共有制崩壞以後の社會の歷史」といふ制限が附されてゐるが、一種の鬪爭中心の社會觀と見ることが出來る。

かくの如き立場から、一切の鬪爭を戰爭と見る人もゐるが、これは一考を要する。鬪爭は、戰爭よりも、廣義である。何人も人間の自然との鬪爭 (Kampf, Struggle) とはいふが、自然との戰爭 (Krieg, War) といはぬことによつても、その一般を知ることが出來やう。戰爭は、一の限定せられた鬪爭である。鬪爭は、あらゆる人間相互間、人間集團（階級・性別・職業・年齡・人種など）相互間の對立抗爭の意味に解することが出來るが、戰爭はかくの如く解することは出來ない。

戰爭の意義は、一基本社會の他の基本社會に對する武力的暴力的對立抗爭である。先づ戰爭は、基本社會と基本社會との對立である。それは一基本社會內の問題ではなくして、基本社會間の問題である。故に、基本社會內における階級鬪爭の如き場合、または支配的勢力相互間のヘゲモニーのための鬪爭の如きは、武力的暴力的の對立抗爭にまで發展することが屢々ではあるが、この武力的暴力的對立抗爭が全面的に擴大された場合でも、內亂 (Civil war, Bürgerkrieg) と呼ばれてゐる。アメリカ南北戰爭・西南戰爭・支那の軍閥戰爭の如きは、これである。この場合、アメリカ南北戰爭の如きは、南部諸州は、奴隷農業による一獨立基本社會として、また北部諸州は、商工業を中心とする基本社會として、各〻獨立の基本社會と考へられぬこともないかも知れぬ。支那軍閥の地方的割據及びその鬪爭もかゝる性質と見ることも出來る。かくの如き場合には、戰爭と考へてもよいのである。例へば、中世における戰爭は、今日の觀念における一國または一基本社會內において行はれてゐるやうであるが、中世的基本社會と近代國民的基本社會の領域範圍とは、嚴密に區別する必要がある。中世における一國の概念は主として地理的觀念であつて、政治的統一體ではなかつた。從つて、當時の地方諸侯は、一の獨立的基本社會の支配者であつたのであるから、これらの間の全面的武力鬪爭は、これを戰爭と解して差支ないのである。要するに、戰爭とは、二つまたはそれ以上の基本社會間の全面的武力鬪爭をいふのである。

今日、戰爭の意義を、すべての國際的對立の意味にまで擴大して解釋しやうとする見解がある。「經濟戰」「思想

戰」といふが如きものも戰爭の狀態に數へやうとするものである。國際經濟的競爭は、現代の如き帝國主義的時代においては、政治的武力的鬪爭と密接不離のものではあるが、帝國主義的對立そのものが直ちに戰爭でないことは、現在の世界は戰爭の渦中にあるのではなくて、戰爭の危機を孕んでゐると見ることによつて明白である。「思想戰」といふことも、現在においては、國家形態の如何を問はず、一國家の理想を內外に宣傳することが、通例であり、この場合、相對立するイデオロギーは理論鬪爭や宣傳戰を行ふことが屢〻ではあり、而して思想相尅の現狀にあることは事實であるが、これをもつて、戰爭とはいひ得ない。中華民國における通電戰の如き、コミンテルンの世界赤化宣傳戰の如きは、この範疇に入るべきものであらう。かくの如き「經濟戰」「思想戰」は、戰爭への條件を形成するものとして、戰爭社會學の取扱ふべき領域に屬するものではあるが、戰爭そのものではない。

戰爭は、基本社會間の問題であり、而して、基本社會間の關係の一部である。基本社會の問題は、社會學の最も重要な研究課題であるが、その研究は基本社會間の關係にも及ばねばならぬ。そして、社會學の課題としては、これまであまりに取扱はれなかつた問題である。基本社會間の關係は、戰爭よりも平和的關係の方が持續的であり、相互作用による影響が多量に存するから、平和における關係も研究の對象である。しかし、基本社會間の戰爭は、それが全面的に擴大するとき、深い影響を基本社會內部に及ぼす。世界大戰におけるロシア、ドイツにおける帝政の崩壞、ロシアにおける變革の如きは、その顯著な例である。故に戰爭の基本社會內部に及ぼす影響の重大性をも、戰爭社會學は、その研究の對象としなければならぬ。

三

戰爭社會學の課題としては、尙ほ戰爭の歷史性の問題がある。戰爭を人間の深い本能に基くとする說は、人間の生存とともに戰爭の存在を主張するのである。(W. P. Paterson, Article: War. Encyclopedia of Religion and Ethics.)この說は、戰爭の恒常的存在を主張するものである。人類の發展段階の如何を問はず、戰爭は常に存在するものとするのである。しかるに、この說に反して、戰爭の恒常的存在を否定し、その歷史性を主張するものがある。

戰爭の歷史性を主張するものは、戰爭の起源の歷史性を求める。自然法學者トマス・ホッブスは、その「レヴィアサン」において、人間の原始的自然狀態において、「萬人の萬人に對する戰ひ」を見たのであるが、ルッソウは、その「社會契約論」「人間不平等論」において、自然狀態の平和生活を主張した。原始狀態における平和生活は、人類の原始時代に、その黃金時代を發見しやうとする詩人、理想家によつて、古來强調せられてゐる。而して、かくの如き人類原始時代における平和生活なるものを實證的に說明し、戰爭の歷史的起源を探究しやうとすることが近時の社會學者の企圖するところである。

その企圖の第一は、先史人類の遺物によつて、武器の有無を研究し、または原始人の住居たる洞窟內における繪畫等によつて、戰爭觀念の有無を實證しやうといふのである。ペリーなどの結論によれば、初期石器時代の人類遺跡の中にあつては、武器らしいものは、何ものも發見するに至らず、たゞ家內用の石造道具を發見したのみであると主張する。また石器時代の人類の洞窟內においては、何等戰爭に關する繪畫を發見しないことは、この時代における戰爭の絕無を證明するものだとしてゐる。而して、石器時代の後期においては、多少の武器を發見するのであるが、これは多く狩獵用のものであつて、戰爭に用ゐたものでないことを主張する。この點については、ソラス敎授も同意見である。

戰爭本能說には、前揭のものの外

William McDougall, An Introduction to Social Psychology. 1908. 1919.

S. R. Steinmetz, Soziologie des Krieges. 1929.

S. R. Steinmetz, Artikel: Krieg im Handwörterbuch der Soziologie.

などがあり、戰爭の起源を人類史における特殊的時期としての文明の起源に結び附けやうとするものには、次の如き著作がある。

W. J. Perry, War and Civilization 1918.

Perry, The Children of the Sun. 1923.

Perry, Growth of Civilisation. 1924.

Holsti, The Relation of War to the Origin of the State. 1913.

戰爭の歴史性を承認して、戰爭は一の征服過程であり、國家形成過程であるとするものに、フランツ・オッペンハイマアがある。オッペンハイマアの學說は主として、グムプロウィッチ、ラッツェンフォーハアに出で、その資料をフリードリッヒ・ラッツェルに求めてゐる。彼の說によれば、戰爭の起源、從つて國家の起源は、牧者民の農耕民に對する征服にあるとするのである。牧者民は、畜産の蓄積とともに、早くから社會的分化が行はれ、初期的國家機構をその社會内に形成し、「經濟的手段」をもつて、その生活資料を獲得するとともに、「政治的手段」——掠奪——を修得しつゝあり、彼等は、狩獵民を掠奪することもあるが、農耕民は規則的勞働によつて、規則的貢納を爲し得る點から、これを征服したのである。戰爭の起源は、こゝにある。オッペンハイマアの說並に、その所說に關係を有する著作は次の如くである。

Franz, Oppenheimer, Der Staat. 1912.

廣島定吉譯　國家論（改造文庫）

この書の第二增訂版と見るべきものに、彼の大著社會學體系中の第二卷國家論がある。

System der Soziologie. Zweiter Band Der Staat. 1926.

グムプロウィッチは、所謂社會學的國家論の主張者であつて、オッペンハイマアに大なる影響を及ぼしてゐる。その關係著作は次の如きものである。

Ludwig Gumplowicz, Die Soziologische Staatsidee. 2. Aufl. 1902.

Grundriss der Soziologie. 2. Aufl. 1905.

Der Rassenkampf. Soziologische Untersuchungen. 1883. 2. Aufl. 1909.

Allgemeines Staatsrecht. 1877.

これらのグムプロウィッチの著作は、その他の著作とともに、

Ludwig Gumplowicz Ausgewählte Werke herausgegeben von Gottfried Salomon.

に收載されてゐる。グムプロウィッチの學統を受けるものは、ラッツェンフォーハアであるが、彼の關係文獻は次の如くである。

Gustav Ratzenhofer, Die Soziologische Erkenntnis.

Positive Philosophie des sozialen Lebenz. 1898.

Wesen und Zweck der Politik. Als Teil der Soziologie und Grundlage der Staatswissen-

cshaften. 3 Bde. 1893.

その他に戰爭の進化一般については、次の如き著作がある。

M. R. Davie, The Evolution ot War. 1929.

Jähn, Kulturgeschichte des Krieges. 1916.

Emanuel Kanter, The Evolution of War. A Marxian Study, 1927.

エムマニエル・カンタアの著は、小冊子に過ぎないが、戰爭の進化に關するマルクス的立場を簡約に書いてゐる。マルクス的立場は、戰爭の歷史性の主張から出發して、原始社會における平和生活即ち野蠻、蒙昧時代における平和生活の存在を主張し、文明時代、即ち階級社會における戰爭の必然性と擴大性を主張し、階級社會の消滅とともに、戰爭の終焉を主張するのである。カンタアは、このことを確信するごとくであるが、この見方はあまりに幾觀に過ぎるやうに考へられる。カンタアの書に多少の加工と自說を加へたものは、

堀伸二著戰爭論（唯物論全書）昭和十年刊

であつて、簡單に讀み得る小著作である。マルクス主義または社會主義一般と戰爭問題については、次の如きものがある。

Scott Nearing, War Organized Destruction and Mass Murder. 1931.

Louis Boudin, Socialism and War. 1916.

Herman Gorter, Der Imperialismus, Der Weltkrieg und die Sozialdemokratie. 1917.

G. Sinoview, Krieg und Krise des Sozialismus. 1922.

Karl Kautsky, Demokratie und Krieg. 1932.

その外戰爭の經濟的原因を强調したものに、

Achille Loria, The economic causes of War. 1918.

Bakeless, The economic causes of modern War. New York 1921.

などがある。

四

戰爭の歷史性が認められれば、戰爭が各社會的發展の段階に照應して異れる形態を採るに至るであらうことは、容易に推測し得るところである。かくて蒙昧期の末期から古代奴隷的基本社會における戰爭、封建的基本社會における戰爭、國民的基本社會における戰爭は、そのそれぞれの社會機構と武器の發展に應じて、異れる形態を採ることは必然的である。近代國民的基本社會の戰爭が資本主義的生產と密接な關係があることはいふまでもない。資本主義と戰爭との關連については、ゾムバアトの著作が優れてゐる。

Werner Sombart, Der moderne Kapitalismus. 4 Bde. 1922.

Krieg und Kapitalismus. 1913.

この書とともに讀まるべきものは、近代資本主義經濟機構の一般を論じたホブスンの著作である。

J. A. Hobson, Evolution of mordern Capitalism. 1926.

住谷悅治・阪本勝・松澤兼人共譯　近代資本主義發達史論　上、下、（改造文庫）

而して、國民的基本社會の戰爭は、その經濟形態における商業資本・工業資本主義の時代においては、國民的基

本社會の成立のための戰爭であり、海外貿易のための戰爭であるが、最近の戰爭は他國への資本投下並にその保護のための戰爭である。帝國主義戰爭とはこれである。現代の戰爭を理解するためには、現代社會が獨占資本主義の段階にあることを認識することを要する。このことを戰爭を中心として理解するためには、第十九世紀初期から現代にいたるまでの戰爭の形態・目的を理解することを要する。このためには、

Major General J. F. C. Fuller, War and Western Civilization. 1832-1932. A Study of War as a political instrument and the expression of mass democracy. London 1932.

の如きは便利であらう。而して、獨占資本主義とその對外的發現である帝國主義の問題については、次の三つの著作は缺くことを得ない古典である。

J. A. Hobson, Imperialism. 1902.

石澤新二譯　帝國主義論（改造文庫）

Rudolf Hilferding, Das Finanzkapital, Eine Studie über die jungste Entwicklung des Kapitalismus. 1910.

林要譯　金融資本論（改造文庫）猪俣津南雄著（解說）金融資本論（同）

N. Lenin, Der Imperialismus als jungste Etappe des Kapitalismus. 1917.

長谷部文雄譯　帝國主義（岩波文庫）岡田宗司譯　レーニン帝國主義體系

この三書は、現代の國際關係を知るのに最も必要なものであるが、この外にも帝國主義一般を論じたものは多數にある。その主なるものを擧げれば次の如くである。

Heinrich Frildjung, Das Zeitalter des Imperialismus. 1884-1914. 3 Bde. 1919-22.

Earl of Cromer, Ancien taud mordern Imperialism. 1910.

Emil Reich, Imperialism ; its Prices, its Vocation. 1908.

Leonard Woolf, Imperialism and Civilisation. 1928.

Fritz Sternberg. Der Imperialismus. 1926.

Sternberg, Imperialismus und seine Kritiker. 1929.

Parker Moon, Imperialism and World Politics. 1926.

Sulzbach. Wesen des Imper alismus.

Erwin Szabs, Freihandel und Imperialismus. 1918.

M. Nachimson, Imperialismus und Handelskriege. 1917.

Heinrich Schnee, Nationalismus und Imperialismus. 1928.

Christian Eckert, Alter und neuer Imperialismus. 1932.

この外にも、個々の國における帝國主義を論じたものは、多數にあるが、いまは一般的なもののみを擧げて置いたに過ぎない。而して筆者は、本稿を終るに當つて、帝國主義並に現代戰爭に關する邦文の譯著書を擧げて置かんと思ふ。

高田早苗　帝國主義論　明治三十四年

幸德秋水　廿世紀の怪物　帝國主義　明治三十四年刊

浮田和民　倫理的帝國主義　明治四十二年刊

大西猪之介　帝國主義論　明治四十三年刊
アーノット著　風間信三譯　帝國主義と石油問題　昭和二年刊
ストレイト著　荒畑寒村譯　帝國主義戰爭と製鐵業　昭和二年刊
ルキズ・フィツシャア著　荒畑寒村譯　石油帝國主義　昭和二年刊
オットウ・バウエル　向坂逸郎譯　資本の蓄積と帝國主義　昭和三年刊
江澤一三著　帝國主義の經濟的考察　昭和四年刊
橘研究所　帝國主義の現段階　昭和四年刊
プレブス・リーグ　田畑三四郎譯　近代帝國主義と其の侵略　昭和四年
パープロギッチ　上田茂樹譯　世界帝國主義論入門　昭和五年刊
クラウゼウイチ著　馬込健之助譯　戰爭論上下　昭和六年刊
ブハーリン　帝國主義論　スターリン・ブハリン全集　昭和五年刊
ヴァルガ　帝國主義論　昭和九年刊
水谷吉藏　國際政治と戰爭　昭和七年刊
ニコライ著　山本宣治譯　戰爭の生物學　二冊　山本宣治全集　昭和六年
荒畑寒村著　戰爭論　昭和七年刊
理想社編　戰爭論（論文集）昭和八年刊
松下芳男　無產階級と國際戰　大正十四年

戰爭思想の研究　昭和十年
アインシュタイン・フロイド・シヨウ著　生形要譯　戰爭批判　昭和九年刊
神田孝一　近代戰爭論　昭和九年刊
ビグー著　高橋清三郎譯　戰爭經濟學　昭和七年刊
正木千冬著　戰爭經濟學　昭和七年刊
ダニロフ著　國際政治經濟研究會譯　軍備と國民經濟　昭和十年刊
サヴィツキイ著　ロシア問題研究所譯　戰爭經濟學—現代戰の經濟的基礎　昭和十年刊

本稿は、戰爭社會學の課題に關する筆者の覺え書きであると同時に、戰爭社會學の若干文獻に關する解說であつて、この種の文獻の充分な記錄でないことは、筆者が最もよく知つてゐる。たゞ戰爭問題の時事論的取扱以外に、また戰爭社會學の存在理由のあること、並にその課題とこれに關する若干の文獻を指示し得れば、筆者の目的は一應達したのである。筆者は他の機會において、戰爭社會學の論稿を草し得れば幸福と思つてゐる。

一九三五・九・二二　稿了